表浜むかし話

山田もと

山田もと生誕100年記念事業

目次

生誕100年を前に

表浜地域の暮らしを著した山田もとさん（潮騒第21号）…… 3

表浜むかし話

「大漁不動様」（潮騒創刊号）…… 4
「水の乏しかった頃」（潮騒第2号）…… 5
「一本木の狐」（潮騒第3号）…… 6
「海亀のお墓」（潮騒第4号）…… 7
「潮の流れ」（潮騒第5号）…… 8
「潮の流れ」（潮騒第6号）…… 9
「ほうべの井戸」（潮騒第7号）…… 10
「まちがい」（潮騒第8号）…… 11
「おばあちゃんの井戸塾」（潮騒第9号）…… 12
「広吉じいの大松」（潮騒第10号）…… 13
「寝祭り」（潮騒第11号）…… 14
「神の釜と久丸さま」（潮騒第12号）…… 15
「かご池の桜」（潮騒第13号）…… 16
「出水はどこだ」（潮騒第14号）…… 17
「三人兄弟と牛」（潮騒第15号）…… 18
「源五郎さの鍬」（潮騒第16号）…… 19
「おそでの山」（潮騒第17号）…… 20
「中田恭一画伯」（潮騒第18号）…… 21

山田もと生誕100年記念事業

もとばあちゃんが残した たはらの民話（潮騒第22号）…… 22

この冊子は、表浜地域づくり情報誌「潮騒」に掲載された山田もとさんに関する記事を抜粋し、まとめたものです。
第22号を除き、当時の原稿のまま記載しています。

生誕100年を前に

表浜地域の暮らしを著した山田もとさん

～本誌「表浜むかし話」の執筆者はこんな方～

山田もとさん
（2004年に逝去されました）

「海亀のお墓」「潮の流れ」「神の釜と久丸さま」「水の乏しかった頃」…こんな昔話を「潮騒」で読んだ方もみえるでしょう。これまで、創刊号の「大漁不動様」に始まり、第18号の「中田恭一画伯」まで毎号「表浜むかし話」のコーナーで表浜地域の生活や文化などを昔話に例えた話を紹介してきました。

その執筆者の山田もとさんは1920年に大草で生まれました。生誕100年を前にもとさんの年譜を紹介します。また、大草校区ではもとさんの作品で演劇が上演されており、その演劇公演の様子を紹介します。

山田もとさんの著書

山田もとさんの年譜

- ●1920年
  渥美郡神戸村大草（現 田原市大草町）志田生まれ
- ●1939年
  野田尋常小学校へ勤務（～47年）
- ●1957年
  名古屋童話作家協会入会
- ●1964年
  田原中部小学校PTA 機関誌「家庭と学校」に作品掲載（2004年まで田原に伝わる民話、伝説、伝記など156作品）
- ●1981年
  「水の歌」刊行
- ●1992年
  田原町町政功労者表彰
- ●1999年
  「牛と歩いた道」刊行
  第6回新風舎出版賞優秀賞受賞
- ●2004年
  逝去

大草小学校6年生が「水の歌」を学芸会で発表（2001年12月）

▲水汲みの苦労を演じた子どもたち
（井戸から水を汲む場面）

「水の歌」は、主人公おしま（1894年生まれ、1975年逝去）が、大草志田に嫁に来てからの水汲みの苦労話を中心に書かれています。もとさんはあとがきで「このお話は、名前を別にしてほとんどが本当のことです」と言っています。これを読むと、当時の大草など表浜地域の人々の暮らしの一端が理解できるでしょう。

大草自治会区長会が「一本木の狐」を市民館まつりで発表（2018年10月）

「一本木の狐」は、本誌第3号（6ページ）で紹介されています。

大草平松に生えている赤松に棲むいたずら狐が主人公の短いお話です。以前の海岸近くの土地の様子や豊川用水通水以降の農業の変化も知ることができます。

▲大草自治会区長会が発表した「一本木の狐」のフィナーレ

表浜むかし話

「大漁不動様」

山田もと

六連の百々あたり、表浜には毎日毎日、どうどう、どどーどどーと波が打ち寄せとる。

今日も昨日も、千年も万年も前からおんなじ音をして波が打寄せとる。そいで百々(ﾄﾞｳﾄﾞｳ)の名が付いたんだと。

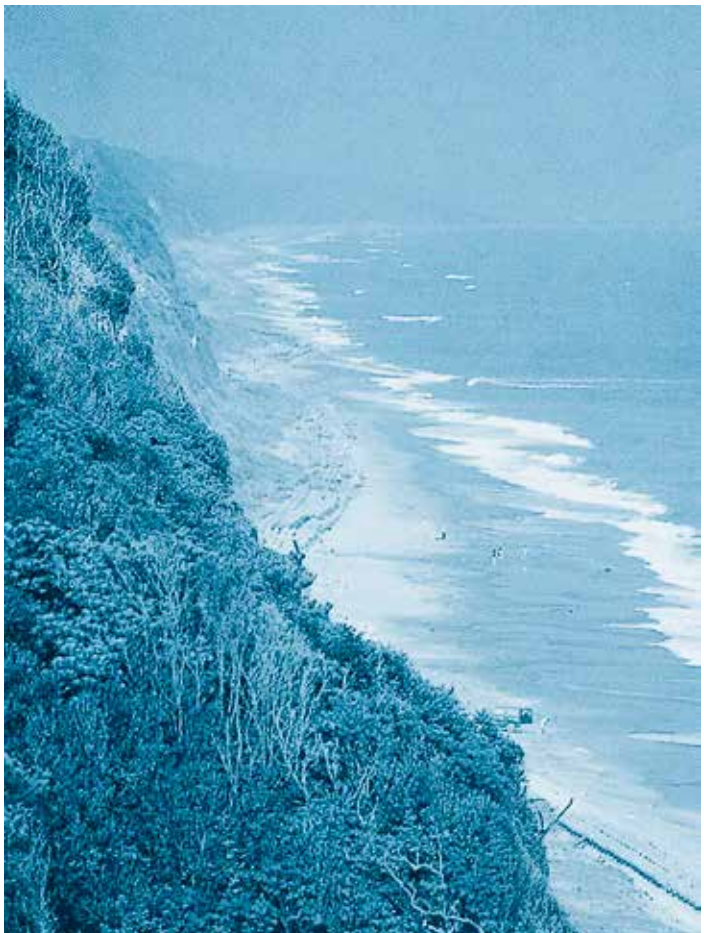
その頃、さあて60年も前にならあか。この片浜十三里といわれとる遠州灘一帯じゃあ、ようけ大イワシだのサバだのがとれてのん、毎日のように大漁だっただ。

とれたての大イワシを、網の引上げられた場所からほうべの上り口の広場まで、いない上げるのが浜の女衆の仕事だったでのん、ぐっすりイワシの入った魚籠を棒の両端に下げていなうなあ重くてのん、嫁にきたばっかしの時にゃあ、腰が立たんほどだったに。その広場で、大釜で煮たり干いたりして煮干しにせたもんだがん。

あの日も大漁でのん、網はだいぶ東の方へ上がったずら。おくまさら仲間は、いつものようにイワシをいなって波打際を歩いとった。おくまさの足に何かすっかかったけど、何のごんどうずらと思って振りはらったままで、重いイワシをいなって行くことに一心だったとよ。

イワシを広場へ置いてきて、また通ったら、また何かすっかかったげえな。「はて、何がすっかかるだかやれ。」と、魚籠を下におろいて、そよう拾い上げて見たと。

「あれれ。」潮に洗いさらされている一尺そこそこの木片だけど、何やら人の形をしてござる。



「ほい、こやなんずら。ただの木片じゃないぞん。お顔があるようだし、足もあって。」浜の男衆に見てもらっただ。

「おおー、こやあお不動様じゃあないか。」

「こやあ確かにお不動様の憤怒の相だ。足も二本、だいぶ傷んでおいでるが、こやあたしかにお不動様だ。」

「昔しあ、海難除けや大漁祈願に、船の舳先にお祀りしたこともあったと聞いたことがあるぞ。」

「こんなりじゃあもったいないのん。」「そやお祀りせにゃあ。」ということになってのん。豊橋の佛師さんに、傷んどるところを直してもらっただ。そいで、ほうべの中ほどの崖上で海が見渡せる所に、小さな祠を作ってお祀りしただ。そや立派なもんだったがん。

このお不動様をお祀りしてからは大漁が続いてのん、ようころばかいたもんだがん。ころばかす？。そうだよ、ころばかすてやのん。魚がいっぱいに入って竹の筒のようになった網袋を、波打際で横にして、冬でも真裸の網の衆が掛け声を揃えて押し上げるだがん。

そやあ勇ましいもんだに。その声がおかまでも聞こえてくると、網に出とらん家のおっかさんらまで、「ほい、ころばかいとるで、ちいともらってこまいかん。」なんてって、籠をぶらさげて浜へ走ったもんだったよ。

そいで、旦那が網へ出とるおっかさんらは、夜毎うしみつ時に崖の上までお参りに来たげえな。大漁ありがとうござんす。明日も大漁をおさずけ下されってのん。

お不動様のお祭りてや、28日だげえなということで、12月28日をお祭りの日と決めただ。その日にゃのん、洞仙寺の和尚さんに、崖上の祠前でお経をあげてもらい、皆でお参りした後、広場でたあへんな餅を投げただ。

この日は網の衆をはじめ、子供もおばあさんも字じゅう皆出て、お参りをしたり餅を拾ったりしたもんだったに。

それがまた不思議なことに、このお祭りの日にゃあきっと大きな色見が来てのん、網の衆らは餅投げもそこそこに舟を出いたもんだったに。両隣りの中網と新谷の網のもんはけなるがってのん。

今はのん、網を引く若いもんが少なくなって、地引網はかけんくなってしまったのん。賑やかだった浜は、淋しくなってしまったのん。それに大きい台風でお不動様のある崖が崩れて祠が危なくなったんで、元の網の衆で洞仙寺様にあずかってもらうことにしただよ。小さなお厨子を作ってお祀りしておくれとるだ。

お祭は12月28日ではいかにも押しつまって忙しいもんで、今じゃあ11月の28日にせるだ。

ほうべの時とおんなじように、餅投げをして賑やかなもんだがね。

表浜むかし話

「水の乏しかった頃」

山田もと

遠く北設楽・南設楽の山々から長い水路を流れてくる豊川用水ができる前、渥美半島の先端から浜名湖辺りまでの片浜十三里といわれる遠州灘沿岸の地域は、赤土のほうべ(崖)の上にあって、どこも水の少ない所でした。

中でも、真ん中辺にある大草、本前、水川、東ケ谷、六連などはなおのことでした。

それでも字々には人が住み、人が住めば木も育ち、畑も耕され、麦と甘藷と食べるだけのものを少しずつ作り、蚕も飼うという忙しい生活がありました。

唯一売れる農作物の豌豆が、山あいの畑になり始めると大忙しで、学校から帰る子供を待ちかねて豌豆摘みをしたものです。

せわし、たのもし紅色だすき
きょうも日暮れて、畑の中
豌豆つみゃんせ、急いでつみゃれ
浜は鳴る鳴る、浜は鳴る鳴る
東風が吹く、ヤレサ、ヨイヤサ

なんて歌を作った小学校の先生もいました。どんな仕事にも、子供も一緒になって働きました。

水の乏しい暮らしは、作物を育てるにも生活をするにも大変なんぎなことでした。

地形や地質のためか井戸のある家はめずらしく、その代わりどこの家にも、軒場に大きな穴を掘ってセメントを塗ったたたきがあり、屋根に降る雨水を貯めて、飲み水にも風呂水にも使っていました。樋を伝ってくる水を貯めるので樋がめともいいました。

樋がめに貯めた水も、真夏の日照りや冬の水枯れ時には無くなってしまいます。

「樋がめが空になったで、今日は風呂水を汲んどけよ。」
「うえっ、はいなくなったのかん。」
「この日照りじゃなあ、たあんと汲んどけよ。」
「はや雨降らんかなあ。」

何しろ忙しい大人達は、遠くにある田の草取りや蚕の桑摘みに行ってしまいます。水汲みは子供達の仕事です。

浜から数十メートルも高いほうべには木々が茂り、浜へ通う曲りくねった細道の森の中に、一つだけ井戸がありました。大草の半身字の子供達は、海から百メートルも離れていないのに澄んだ水がこんこんと湧き出すこの井戸まで水汲みに来ました。

さしあいといって、大きい子が後ろで、小さな子が前で、棒の真ん中に桶を吊るし、急な坂をいない上げるのです。一人で汲む子は、手桶に少し入れて何回でも家まで運ばなければなりませんでした。だから風呂は小湯で、二度沸かし三度沸かしも珍しくなかったんです。

何時の頃だったか、この森の中におよしという人が住み着いていました。体が大きく、男か女か判らないほど顔は日に焼け、髪はぼさぼさ、話も笑いもしませんでした。足が悪くて、外またにひょっくり、ひょっくり歩いて、ほうべの森へ帰って行く姿をよく見かけました。

近くの人達は、黙って野菜を置いてきたり、井戸で会うと水を汲んであげたりしましたと。浜に近いせいか、言葉は荒っぽくて怒られているのかとびっくりしますが、根は人が良く、およしも安心して暮らしていました。

戦後になって、この井戸谷の井戸を水源として半身字に簡易水道ができました。ガチャーン、ガチャーンと自動ポンプの音がするだけで子供達の声も聞こえなくなり、いつの間にかおよしの姿も見かけなくなりました。

いよいよ、豊川用水がほうべの高みを通水すると、赤土の小松原は真平にされ広い畑が沢山できました。人をばかして話題になった狐や狸の住む一本木の大きな女松も切り倒され、やれ、鯖を取られただのと人々の口を賑わすこともなくなりました。

豊富な水のお陰で、暮らしかたは大きく変わり、広い畑では、キャベツ、ブロッコリー、西瓜、メロン等々、沢山の野菜が出荷されるようになり、人々の生活はとても豊かになりました。

表浜むかし話

「一本木の狐」

山田もと

遠州灘の波の音が、ほうべの森を通して間近に聞こえる大草から東の方一帯は、つい三、四十年前までは、背の低い松や雑木のまばらな赤土の原っぱでした。だから地名さえ平松です。

この平松原の中を、ほうべに沿って通る道と、大草志田から上ってきた道の三叉路に、大きな女松（赤松）が一本だけ傘を広げたように立っていました。根元は大人の一抱えにも余る太さで、二メートル程の所から太い枝や細い枝が入り組んで、まこと傘を広げた格好でした。

鳥は巣を作り、畑の近い人は大根やそば等を掛けて干したり、雨宿りしたり、夏は日陰で昼寝もしました。この辺りを土地の人は一本木と言っていました。

ここには昔から狐が棲んでいて、夜になると人をばかしたそうです。浜の地引網に出ていた誰それさは、酒を飲んでの帰り、立派な風呂に入れてもらったと思ったら、肥溜めの中だったげえな。とか、坂上の誰とやらは、浜で買った大鯖を盗られたげえな。とか、嫁入りの御馳走などは、いくらしっかり持っても、一本木を突っ切らぬうちに無くなってしまうげえな。とか…。

イラスト／石川棟密

子ども達は、はったけ取りによく一本木へ行ったものですが、山へ入る前に皆で

あかの昼間のどん狐ー
人をばかすと子を取るぞー

って、この木の下で大きな声で歌ってから山へ入ったものです。狐はこの声を聞くと、子ども達をばかさないのだそうです。

松茸には巡り合えないが、少し低みの雑木の下には、「ねずみ茸」や「初茸」「足長ばったけ」「ぬめり茸」等があって、それを探して遊ぶのが楽しみでした。

ある日、一本木の小松原に、めったにない「ろうじ茸」が行列を作って生えていたんです。

「こんねんあるとは知らなんだなあ。」
「篭を持ってくると良かったよね。」
皆大喜びで採って、笹に通したり着物を脱いで包んだりして帰りました。この沢山の「ろうじ茸」を見た〝安ぞうさのおばあさん〟は、
「昔から、こんねにたあへんな「ろうじ茸」はあったためしがないだ。こやきっと、一本木の古狐がばかしとるに違いないだ。」
と言い出したんです。
「そんなことあるもんか。」
子ども達は、折ってみたり引っ繰り返してみたりしましたが、「ろうじ茸」は「ろうじ茸」、なんの変わったこともありません。
「ええあんばいに、狐退治をしてくれようぞ。」
おばあさんは大釜にぐらぐら湯を沸かして、その中へ「ろうじ茸」を放り込みました。今に狐が、コーンコーンと泣いて飛び出して来るかと、皆でかたずを飲んで待っていました。が、「ろうじ茸」はぐつぐつ煮えても、とんと狐は出てござらなんだと。

豊川用水の工事が始まりました。
「一本木の辺りが畑になるだげえな。」
「あの一本木の松を残してくれやあええけど。」
ブルトーザーがものすごい勢いで、松や雑木を引っ繰り返して、小高い所は削り、谷は埋めて赤土の広場にしてしまいました。しまいまで残されていた、あの一本木の女松も、皆の心配をよそに切り倒されてしまいました。
「ほい、あそこにおった狐はどうしたずらか。」
「ほうべの穴へでも逃げやあええけどのん。」
やっぱり狐のことも心配でした。

今はこの辺り、高い土手の上を豊川用水が流れ、この平松から神戸、六連の方まで見渡す限り畑になって、キャベツ、白菜、ブロッコリーなどが栽培され、ハウストンネルの中には、時ならぬ野菜やメロンが育っています。狐が三匹も生まれ育った一本木の切り株も、埋められたのか腐ってしまったのか、いつの間にやら見えなくなりました。

狐はどこへ行ってしまったのでしょう。夕方になっても、鳴き声も聞かれなくなり、この頃はばかされたという話も、とんと聞かなくなりました。

表浜むかし話

「海亀のお墓」

山田もと

「浜へ亀がよったげえなぞ。」「どえらい大きい亀だげえな。」

誰がいいだしたのか、どこから聞こえてきたのかわからないのに、まるで疾風のように、次から次へつたわった。学校帰りの子どもたちは、顔を見合せると、

「ほい、わしらも見い行くか。」「うん、いかまい。」

どこの浜だかわからないのに、前の子達が走りだすと、その後に続いて、みんなほうべの方へやみくもに走った。

私も友達のつうさやスエちゃと、斜に肩からかけた鞄をおさえて、浜街道をつっきると、いつも遊びに行ったり、学校から浜砂を運び上げたりする、東のほうべへ走った。

ほうべの上の、松林の中の小道に人だかりがしている。浜の衆が何かいいながら円くなっている。のぞきこもうとしても見えない。皆がくっつき合っていて中が見えない。しゃがんで、皆の足のすき間から覗くと、黒っぽい大きな丸いものが、道いっぱいにじっとしている。

「それ、前へ出てみよ。」

赤銅色のおじさんが、前の方へだしてくれた。

「浦島太郎の亀だ。」

私はつい叫んだ。

「そうだな。こいだけ大きけや、浦島太郎をのせられるなあ。」

赤銅色のおじさんもいった。

それはほんとに大きな亀だった。

おとながまたいで乗っても、両足が地につかないほどである。絵で見るとおりな亀の甲羅は、青みどろのようなもので汚れてはいるが、くっきりと亀甲型にひび割れている。尾っぽのような長い海草が、両方の腹の辺りから、ずらりと並んでいる。浦島太郎の絵本で見た、亀の尾っぽと同じである。長いのは１メートルもあろうか。乾いて干からびたようになっていた。

イラスト／石川棟密

頭がない。こんなに大勢の人にかこまれたので、こわがって頭を引っこめているのかな。大きな丼にいっぱい水が入れて、頭の所においてある。そばに酒の一升びんが置いてある。

「おしかったなあ。こんな立派な亀が死んどるとはなあ。」

「あれ、死んどるのかん。」

「うん、浜に打ち上げられておった時にゃあ、はい死んどっただ。」

「４人もの人で、ここまでいない上げただに。」

「生きとやあ、酒をたあんと呑まして海へ帰してやるだけどなあ。」

「酒？」

「ああ、亀は酒が大好きでな。酒を呑まして帰してやったら、大漁間違いなしだったになあ。」

ああ、あの丼は酒が供えてあったのか。

「おとましいことをしたのう。」

一瞬皆がしんとなった。

「ここの松林じゃあ、どうだい。」

「よからあのう。」

なんのことかわからなかったけれど、亀は動かないし、酒も呑まないので、私達は帰ってしまった。２、３日たっての学校の帰り。

「まあいっぺん、亀を見いいかまい。」

「どんねんなっとるずら。」

私達3人は、ほうべへ行ってみたが、亀の姿は探してもなく、松林の中に、赤土が丸く盛り上げられていた。

「亀のお墓だね。」

「うん。きっとそうだよ。」

私達は手を合わせた。波の音がひときわ大きく響いてきた。 昭和４年か５年のころ、大草海岸のほうべであったことだった。それから亀のことは、とんと忘れて、この地を離れ、60年の余もたってしまった。

ふっと思い出して、亀のお墓を訪ねてみる気になり、東のほうべへ行こうとしたが、その道さえわからない。探して、やっとみてびっくり、昔通った道が、どこが道やらわからないほどに草が茂り、木が生えていて、両側の松、海風に耐えて枝振りおもしろく茂っていた松は１本も見当たらない。

地引き網をやらなくなってから50年にもなろうか。あの勢のよい掛け声が消えて50年、人々が踏まなくなれば、道も山もこんなにも荒れ果ててしまうのだろうか。

亀の坐っていた所は、道だったけれど、どの辺りか見当もつかず、ましてお墓の所在など、子どもの時の記憶だけでは、どうしようもない。足を踏み入れるすき間もないほどに草や雑木が茂っていて、あの大きな亀のお墓には会えずに立ちつくした。

変わらないのは、海の蒼さと、どうどう、どうどうと響く波の音だけである。

表浜むかし話

「潮の流れ」

山田もと

今日は夏休みの出校日、先生が日誌を見てくれただけで掃除を済ますと学校は終った。帰り道で、表浜に近いみつ子が囁いた。

「ほい、今年はとてもええ内川ができとるで泳いでいかまい。のん、かよちゃん。」

「うん、ええよ。」

やっぱり浜育ちのかよはすぐ賛成だ。内川とは、波と風が何処からか砂を運んできて、大波のくる辺りに横に長い丘を作る。その丘を乗り越えて大波が寄せるが、砂の丘に遮られて、小さくなった波が砂浜と波打際に川を作る。それを内川と呼んでいた。内川は毎年できるとは限らず、できない年もある。池のようになることもあり、時には長く長ーい川のようになることもある。

大波の中で遊べない小さな子ども達は、この内川で泳いだり遊んだりする。

「あんたら、※あげだで泳げんずら。」

「そんなことないよ。川で泳ぐもん。」

まつ子も千代もとも子も、あげ育ちなので本当は泳げないのに、千代は負けん気で強がりを言っている。

「あんな田んぼの中の小さい川で。」

「堰が止めてあるで深いよ。」

三人は、川が堰止めてない時、足だけ入って遊ぶ程度である。いや、千代は男の子とよく川へ行くから泳げるかも知れない。とも子は、裸で海に入ったこともない。でも、あの大きな波に揺られて、ぷーかぷーかできたらどんなに愉快だろう。

「どうせる？昼ご飯までに帰ればいいけど。」

「うん、行かまい、行かまい。」

「※ちいとだけだよ。家の人に叱られるもん。」

と言うと、とも子も皆と一緒に大声をあげて、ほうべを駆け下りた。古い舟の陰で着物を脱いで、夏休みの日誌をその下に隠して、内川へ飛び込んだ。

「あー、※つべたいー。」

海の水は、とっても冷たいけど気持ちがいい。泳げないとも子達は、内川の流れの中で腹這いになって、ばたばた、ぴちゃぴちゃ。浜育ちのみつ子やかよは、大波に乗って揺られたかと思うと、ザザザーっと渚に打ち上げられて大笑い。また波に向かって泳いで行く。とも子達も、いつの間にか内川の外へ出ていた。波に誘われて少し沖へ出たとも子は、大波に揺られて体が海底から離れた。フラフラっとして何かに掴まろうとしたが、手に触る物が何もない。川だと岸の草に掴まれるのに。あっぷあっぷ、あっぷ……体が沈んでも海底がない。もがいてもがいても、水が動いていて立てない。立たなくてはと思ってもどうにもならない。

「もうだめだー。」

その時、大波がとも子の体を渚に打ち上げてくれた。口の中が潮からい。

「ああー海は※おそがいとこだ。」

波から逃げて遊ぶとも子に、皆は見向きもせずに平気で泳いでいる。何時間たったやら…。

「どこのガキどもだ。はや上がらんか。」

知らない浜の男衆が怒鳴った。みな濡れた髪を絞りながら、砂浜に立ってびっくり。ほうべの景色が全然違う。見たこともないほうべだ。着物を脱いで置いてきた舟もない。

「ほい、ここはどこだん。」

「※水川だ。」

「あれー、わしら大草で泳いどっただけど、変だやあ。」

「ばかもん、この潮の流れが分からんか。今に途方もない所まで流されてしまうぞ。はや帰れ、帰れ。」

海の水は、同じ所でばかり波打っていると思っていたのに、この大きな海の水全体が流れているとは知らなかった。見た所全然流れているようには思えないのに、自分達がいつの間にか水川まで潮の流れに連れて行かれたこたが、とも子には不思議でならない。

「ああ、※こんきい、こんきい。」

「もう歩けんよ。」

裸で裸足で腹へって、くたくたになった五人は、やっと大草の浜まで辿り着いた。

※あげ:海際に住んでいない人　※ちいと:少し　※つべたい:冷たい
※おそがい:恐い　※水川:現在の神戸校区（南町地区）　※こんきい:疲れた

表浜むかし話

「潮の流れ」

山田もと

ゆきの学校は、遠州灘の近くです。学校の砂場の砂が減ってしまったので、今日は浜から※まさごを運んで、砂場へ入れる作業です。

3年生以上で50人位の生徒が、布の袋や風呂敷の中に、浜のまさごを持てるだけ入れて、ほうべの坂を運び上げるのです。

砂浜に立ったゆきは、びっくり・・・・。

「あれっ、あれ、あれなに？きれいー。」

「あんなもん、いつでもできとるがね。」

「誰が作っただん。」

「ゆうべ風が強かったので、できたずら。」

浜育ちのとしは、平気な顔です。

「風が通った足跡かん。」

なんて素晴らしい。浜のまさごが小さな波の模様をかいて、同じ模様がいくつもいくつも、目に見える限り続いているんです。丘育ちのゆきは、初めて見る、この雄大な砂の模様に目を見張っています。

「はや砂を運ばにゃ、おいていかれるよ。」

としもまさ子も他の生徒も、平気でこの素晴らしい風の足跡を崩して袋に入れています。

「ほーい、崩さんどいて。」

「風が吹きゃあ、またできるよ。」

男子の暴れん坊たちが、この模様の上を走り回って、めちゃくちゃにしてしまいました。

急な坂道は狭くて七曲り。その道を、袋に入れたまさごをしょったり、さげたり、風呂敷の隅からこぼしながら、まるで蟻の行列です。

ゆきがよちよち登っていくと、小さいよねが道の※くろに座っています。

「どうしただん。」

「※こんきくて歩けんよ。」

「これっぱか持っとってもかん。」

ゆきは笑い出しそうです。

よねの袋には、かた手に2杯位しか、まさごが入っていません。

「さあ、持ってあげるで歩きん。」

よねはゆっくり立ち上がって、ゆきに引っ張られて、登っていきます。

「おお、下りは楽ちん、楽ちん。」

早い子は2回目を駆け下りて行きます。

「どいたどいた、どいたあ。」

大きい男子が、棒のまん中に袋を3つもぶら下げて登って行きます。

ほうべの上では、先生や大きい男子が、牛車の上で受け取ってくれます。

今日は、風も凪いで波も静か。冬の日差しは暖かで、ほうべを3回上り下りすれば汗ばんできます。学校の砂場もこれでふかふか。ゆきは砂運びが楽しい。またあの風の足跡にも会いたいです。

※まさご：細かい砂　※くろ：隅　※こんきくて：疲れて

お悔やみ

平成16年9月4日、「表浜の昔話」の執筆者である山田もとさんがご逝去されました。慎んでお悔やみ申し上げます。

山田さんは、潮騒創刊号から第6号まで、表浜地域の生活や暮らしなどを昔話に例え、また実体験に基づくお話を私たちに分り易く、時には方言を交えながら執筆いただき、とても温かな表現で読む人の心を和ませてくれました。

山田さんからいただいた、これまでのご支援、ご協力に感謝申し上げるとともに、心安らかに永眠されることを深くお祈り申し上げます。

平成16年10月1日

田原市太平洋岸総合整備促進協議会　委員一同

表浜むかし話

「ほうべの井戸」

山田もと

遠州灘にそって、赤土の崖が渥美半島の先から静岡県境まで続いています。この赤土の崖を土地の人は“ほうべ”と呼んでいます。

このほうべは、高いところは百メートルもあり、ひだのように引っ込んで谷になり、飛び出して赤土の山を作ったりしながら、雨や風、波にさらされて、だんだん崩されています。

田原町大草、半身のほうべに、井戸谷（いどや）という谷がありました。この辺りは水がなくて、大方の家で雨水を使っていました。ほうべの松林をくぐり抜ける細いけもの道を50ｍ下ったところに、いつのころ掘られたか分らない昔からの井戸がありました。

いつも澄み切った水がこんこんと湧いていました。砂浜が近いのに塩からくもなく、どんな日照りにでも水が干上がったことはありませんでした。半身の人たちは、雨水をためた樋がめの水が無くなると、この井戸の水を汲んで、いないあげて使っていました。「どっこいしょ、どっこいしょ。」「ああ、えらい、えらい。」などと言いながら急な坂を担いで運びました。

昭和のはじめ頃、この井戸谷に、およしさというおばあさんが住みついていました。どこから来たのか、身よりの人も居るのか居ないのかも分りませんが、浜の人が網を掛けたこぼれ魚をもらったり、その魚で煮干しを作って田原の市まで売りに行ったりもしていました。

がっしりした体、手も顔も潮風にやけて赤黒くなっていました。不自由な足で、田原の町までゆっくり、ゆっくり歩いていました。ぼさぼさの髪、汚れた着物は柄も分らず、ただまっ黒に見えました。戦時中に亡くなったらしいです。

【現在の井戸谷】
簡易水道の名残（手前）と埋まってしまった井戸（奥）

戦後、半身の人たちはここを水源にして、簡易水道を造りました。じじじじー、がったんがったん、だれもいない松林の奥で、波の音とともに夜も昼も、機械はいつも働いていました。豊川用水が通り、この簡易水道の機械も止ってしまい、井戸をかえりみる人もいなくなりました。

およしさのことも忘れられていきましたが、このほうべの谷のことを、今でも井戸谷と呼んでいます。

（お断り）

潮騒№6まで「表浜の昔話」の執筆者でありました山田もとさんは、平成16年9月にご逝去されましたが、表浜地域で生まれ、実体験を通した心温まる実話は多くの皆さんに心豊かな安らぎを与えていただいています。私ども編集事務局がこの旨をお話したところ、ご遺族の皆様が快くご理解いただきましたので、今後も山田さんの遺作を紹介させていただきます。

表浜むかし話

「まちがい」

山田もと

森のおくにすんでいる、たぬきのかあさんは、せっせとはたらいて、ためたお金をもって、町へ買物にやってきました。

お正月ちかい町は、どこも大にぎやかです。

たぬきのかあさんは、まず食料品店へはいって、こむぎこ、じゃがいも、ハム、ソーセージ、おいしいみかんにおかしなど、山もり買いました。

「これで、おかんじょうたのみます。」

はじめての一万円です。うれしくて、つい、にこにこしていました。

店の主人のやぎは、あちらからもこちらからものおきゃくさんから、むぞうさにお金をうけとると、ガチャンガチャンと、ボタンをおしてけいさんし、おつりをあげています。

「まいどありがとうございました。」

「こ、これは…。」

たぬきのかあさんは、びっくり。買物は二千八百円だったのに、おつりは二千二百円しかありません。

「あの、さっきのお金、一万円でした。」

「え、とんでもない。五千円でしたよ。」

「そんなばかな…たしかに一万円…。」

「あなたにもらったのは、このおさつで、たしかに五千円。」

「そう、たぬきさんのは、たしかに五千円でしたよ。わたしみていました。」

よこから、かん高い声でいったのは、白い毛がじまんの山ねこでした。

店のおきゃくは、みんなたぬきのかあさんを、じろじろみて、

「あんなみなりで、一万円ね。」

「いまどきは、なにをいうやらね。」

などと、ささやいています。

たぬきのかあさんは、しょんぼり店をでました。

――それでも、子だぬきのくつとぼうしだけは買わなくては、あんなにお正月を楽しみにしていたんだから、とうさんのズボンと、わたしのエプロンはやめにしよう――

「うまくいったですね。ホホホ。」

店で、山ねこがいいました。

「ええっ、さっきのことはうそで…。」

「まあね、あんなけちんぼの、たぬきをかばったって。」

「ああ、わるかった。わたしがまちがえていたんですか。」

「それより、すこしはおれいが…。」

「とんでもない。早く、たぬきさんにとどけてやらなくては。」

「ばかだねやぎさん。このひろい森の、どこにいるやらわからないのに。」

それでも、やぎの主人は、日のくれかけた森へ、かけだしていきました。

表浜むかし話

「おばあちゃんの井戸塾」

山田もと

「ただいま。ああ、やだやだ。きょうは塾行くのいやだなあ。」
としくんはランドセルをほうりだし、くつをけとばして汗をふいた。
「まあ一休みおし、おやつたべながら。」
おばあちゃんは台所で、そら豆の皮をむきながら、のんびりだ。としくんはジュースを一気に飲んで、
「おばあちゃん、塾行ったことある。」
「塾、塾って、何せる所だえ。」
「やだおばあちゃん、塾しらないの。学校帰ってから勉強するところだよ。」
「ああそっか。そんなら毎日行ったよ。」
「へえ、どこの塾へ。」
「おばあちゃんの塾は井戸、井戸塾よ。」
「井戸？井戸塾…どこにあったの。」
「昔会場といった、今の公民館の横。」
「へえ、何の勉強？　国語？算数？」
「国語、算数、理科、社会、水汲(くみ)み。」
「なあーんだ、お手伝いか。」
「そや、昔は水道がないでの、ふろ水汲みは子どもの仕事よ。井戸塾はなんでも教えてくれたよ。まず“一ぱいよんどくれましょう”*1ってゆってから汲むだ。あやちゃも、つうさ*2も、みんなそうだ。」
「そんなの勉強じゃあないよ。」
「そこの井戸水は茶色での、なぜだろ。」
「わかんないよ。そんなこと。」
「鉄分が多かったんだよ。だから飲み水はこして使うだ。こしがめという大きなかめに、しゅろの皮をしき、炭を並べ、浜のまさご*3を入れて、その上に瓦をおくだ。その中へ水を汲み入れると、下の穴からでる水はすんすん*4にすんどるだ。そのこし方、理科のテストにでたんだよ。おばあちゃん百点さ。」
「すごーい。まだ百点ある？」
「あるよ。竹ざおにつるべをつけて、井戸の中へするするーと入れるだろ。つるべに力を入れて水の中に沈ませて水をいっぱい入れる。さて引き上げる時、水の中のうちは軽いのに、水からはなれたとたんに重くなる。なーぜだ。」
「あ、それ浮力(ふりょく)、理科でならったよ。」
「えらい、としくんも百点だ。毎日姉ちゃんと、棒のまん中へいなえ*5をつりさげて水を汲みながら、歌も歌ったし算数もした。でもの、おばあちゃんも井戸塾なまけて、遊んでしまったことがあったよ。暗くなって帰って、だれか水汲んどいてくれたかなと思ったのにだめだった。おっかさんに大目玉、姉ちゃんにも怒られながら、しおしお*6水汲みに行ったよ。夜の井戸塾にゃだれもおらん。お星様がきれいでのう。」
「おばあちゃん、ぼく塾へ行ってくる。」
としくんはかけだしていった。

＊1【一ぱいよんどくれましょう】:一ぱいくださいな
＊2【あやちゃも、つうさも】:あやちゃんも、つうさんも
＊3【まさご】:表浜の細かい砂
＊4【すんすん】:すごく透明な様子
＊5【いなえ】:かつぎ桶
＊6【しおしお】:しょんぼり

【井戸は社交場?】

水が貴重だった昔は、「井戸端会議」という言葉があるように、共同井戸の周りに自然と人々が集まりました。現代でも、7Pでご紹介している大草の取り組みのように、井戸を中心に交流の輪が広がっています。

表浜むかし話

「広吉じいの大松」

山田もと

ながい年月、あらしにも、日でりにもまけず、生きつづけきた木、わたしたちを、じっと見つづけている木、そんな木をたずねてみたいと思います。

田原町大草志田の農家に、天をつくように、まっすぐのびた、大きな松の木があります。

安政三年生れの広吉じいが、十五、六の時、家のまわりに築土(ついじ)*1をつくるため、ちかくのかご池から、土をはこんできました。ふみかためていると、土の中に、めをだしたばかりの、三センチほどの松がありました。なにげなくふみつけてはみたものの、

「まてよ。」

広吉じいは、思いなおして、そのめをおこし、うえなおしておきました。

何年目かー

ついじ*1の草の中から、すんとめをのばしている、松をみつけました。

「やれ、お前は生きとったか。」

広吉じいは、かわいく思って、ねもとの草をとってやりました。

松はついじの上でずんずん大きくなり、広吉じいのせいをこし、やねをこして、あたりの木もおいぬいて、まっすぐのびつづけ、広吉じいのじまんの大松になりました。

昭和十四年、広吉じいが死んだ時には、二かかえにもなっていました。

むすこの定じいは、木のぼりがとくいで、高いところまで、よく枝打ちをしたので、松はみごとに、まっすぐのびつづけました。

いせわん大ふうの時、山かげのしゃめんにある杉は、ねこそぎたおれましたが、一ばん心配した、この大松はぶじでした。定じいは、

「たいした松よの。ふだんの風あたりで、ちゃんと心がまえができとるだ。あの杉は、ふだんぬくぬくしとったでひとたまりもなかっただ。」

といって、ついじから、はみだしている、大松の根をなでていました。

その定じいも死に、今は孫の耕にいと、ひこ*2のたかくんにみまもられながら、そうそうと風の音をたてています。

＊1【築地】:土だけをつき固めた土塀。
＊2【ひこ】:孫の子。ひまご。

表浜むかし話

「寝祭り」

山田もと著

神戸に久丸（ひさまる）神社という、お宮があります。旧正月のさる、とり、犬の日にお祭りがおこなわれます。

お祭りといえば、おみこしをかついだり、もち投げをしたりしますが、このお宮さまのお祭りは、みんな家の中に入って、雨戸をしめ、ひっそりと寝（ね）てしまうのです。だから寝祭りです。

久丸さまが、お通りになる行列を見てはいけない。見ると、目がつぶれるぞと、言い伝えられてきました。

むかし、この近くに住んでいた人が、どうしてもこの行列を、一目見ようと思って、雨戸のふし穴から、そうっとのぞいたそうです。すると、ほんとうに目がつぶれてしまったということです。

大むかし、神戸の太平洋にそった村々では、急に魚がとれなくなって、暮らしに困っていました。

「どうしてだろう。」

「魚は、どこへいってしまったのだろう。」

「神さまに、ごきとうをあげようか。」

などと、漁師たちは、大さわぎしていました。

ある朝早く、漁師がひとり、浜辺へ来てみました。朝日にてらされて、波は金色にかがやいています。その波にうたれて、今までに見たこともない、りっぱな舟が一そう、流れついていました。中をのぞいてみると、ひとりの神さまが、たおれていました。かみをみずらにゆい、白い着物を着て、りっぱな太刀をはいていましたが、顔も手足も病気のために、ただれはてて、見るもむざんなすがたです。

きっと遠い国から、流されて来たのでしょう。

漁師は、村人を呼び集めて、神さまを、ほうべの松林の中へつれていき、たき火をして、あたためてあげたり、おかゆをはこんであげたりしました。

村人は、小屋を作って、かわるがわる、たべものをはこんであげましたが、久丸さまは、自分のみにくいすがたを、人に見られるのをたいへんきらいましたので、小屋の外へ、そっとおいてきました。

久丸さまが来てから、また、魚がたくさんとれるようになって、村はゆたかになりました。

この久丸さまをおまつりしたのが、久丸神社です。今でも、久丸さまのすがたを、見ずにいる村人の思いやりが、伝えられているのでしょう。

【著者紹介】
◎1920年　神戸村大草志田生まれ
◎1939年～47年　野田尋常小学校へ勤務
◎1957年　名古屋童話作家協会入会
◎1992年　田原町町政功労者表彰
◎2004年　逝去

山田さんは、田原中部小学校のPTA機関誌「家庭と学校」へ1964年から41年間にわたって156もの作品を寄せ、田原に伝わる民話や伝説、田原に縁のある人物の伝記はもちろん、地域の子どもたちの暮らしぶりを伝え、多くの皆さんに心豊かな安らぎを与えてくださいました。
「表浜むかし話」では、山田さんのご逝去後も、その作品を紹介させていただいております。

表浜むかし話

「神の釜と久丸さま」

山田もと著

田原町六連に、神の釜というところがあります。昔は、山また山でしたが、今はひろびろとした畑になり、夏はスイカやメロン、冬はキャベツ、白菜など、いろいろな野菜が作られています。

この畑の中をくぎって、みどりの木々におおわれた大きな沢が一つ、むかしは川だったかもしれません。

この沢の西がわ、小高いところに小さな石のお社がひっそりと、小さな石のさくにかこまれてあります。後ろは沢、前も横も畑です。神の釜です。

むかし、むか～し、久丸さまという、とおとい身分の方が、六連の百々の浜へ流れつきましたと。大昔は、らい病など人にうつる病気になった人を、箱舟にのせて海に流したそうです。久丸さまもこの病気だったらしく、顔も手足も、みにくくなっておいでたので、人に見られることをきらい、山の中へお入りになって、ひっそりとくらしておいでましたとか。

村の人は子どもたちにまで、

「見い～いくなよ。」

「神さまが、にたきをおせりるだ、見ては、もったないぞよ。」などといって、山へいかせませんでしたとか・・・・。

神さまが、にたきをなさったところということで、このあたりいったいを神の釜というようになりました。

久丸さまは、のちに神戸のうるし田にうつられ、今はそこに久丸神社がたっています。

久丸神社のお祭りを、寝祭りといいます。

おねぎ様が、百々の浜まで行ってみそぎをなさり、神の釜でご神事をなさってから、お宮へお帰りになるのですが、どんなことをなされるのか、だれにもわかりません。ご神体を一時神の釜へおうつしするのだという人もいますが、村の人でもしりません。

この時、おねぎ様にいき会うと熱病になるとかいって、村中雨戸をしめて寝ているのです。ずっと前のころは、神戸の学校はお休みになって、子どもたちは早くに家へ帰りました。

また、ほかのいいつたえでは、久丸さまは、南北朝のころいくさをのがれて、この地にこられた王子さまだったともいわれています。

豊島の前田には、久丸さまが上陸された船戸とか、物見塚などという丘もあるそうです。

表浜むかし話

「かご池の桜」

山田もと著

田原町大草の、かご池の土手に、古い山桜の木があります。二かかえもあるみきが、池の方へぐんと出て枝をはり、上にのびた枝がまたひろがって、二階屋のようになっていました。毎年白い花がいっぱいさきました。

むかし、このあたりの子どもは、みんなここで木ぼいやいをやりました。

大将かくの上級生が、遠くから走ってきて、桜の根本を、枝がわかれている所まで、てっぱでかけのぼります。ほかの子も、思い思いの木にのぼって、じゃんけんをし、鬼がきまると、枝から枝を逃げまわり、追っかけるのです。桜の枝は四方にひろがっていたので、椎の木へも、とっぺらへも、えの木へもうつれます。逃げ場がなくてつかまったり、地面におりると鬼でした。

わたしは木のぼりがへたでしたから、桜の木に、てっぱでかけのぼることを、ひっしでならいました。

また、横にのびた桜の枝へ逃げていって、そこからとっぺらにうつることができず、一ばん先っぽまでいってしまいました。ふっと下を見ると、雨あがりだったのか、かご池に水がたまっています。わたしは、しなる枝にしがみついて、泣きだしました。みんなが、「もっとの泣きべそ、もっとの泣きべそ。」

と、はやしたてます。わたしは、泣きながらも、

「ここまでおいで、おたからしんじょ。」といって、雨蛙のように桜の枝にしがみついていました。

上級生になると、わたしも女の子、木ぼいやいはしなくなり、雨あがりの桜の根本で、

葉桜のおいかぶさりし池の面に
　水すましどもあまた遊べる

などと歌をよんで、先生から◎を、もらったりしました。

池のはたにすむぎきちじいは、八十をこしていますが、

「おらも、子どものじぶん遊んだけど、今とかわらん太さだったなあ。」

と、ふしぎがっています。

この桜も、このごろは、さすがに年とったらしく、太いみきはつやがなくなり、がさがさと皮がめくれています。わたしが泣きべそかいた枝は、くさってとちゅうから折れ、白いこけにおおわれています。上にひろがった枝には、まだ毎年、赤いほどこい新芽がもえ出し、白い花もさきます。

もうこのごろは桜の木には、だれものって遊ばなくなりました。

表浜むかし話

「出水（ですい）はどこだ」

山田もと著

「あれっ、ない、ないよ。」

久しぶりに生まれた故郷へ帰ったおばあちゃんは、青田の中を流れる川の橋に立って、川の石垣をよくよく見まわしている。夏休みの宿題ノートを持ったひろ子とまきも、川をのぞきこんだが、おばあちゃんの話した、きれいな水のわきでる所は見つからない。

「おばあちゃん、場所まちがえたと思う。」「いや、たしかにここだ。この志田橋のすぐ上だったもの。」

おばあちゃんは、川堤防の草をかき分けて、石垣までおりていったが、出水のしていた黒い木はない。その出水までおりていく石段もない。

「うーん、どうなっちゃったずらか。」おばあちゃんは草むらに坐りこんだ。「わしが子どものころは、この田面で夏休みじゅう田の草をとったもんだ。暑くて暑くてのう。帰りにここの出水をのむのが楽しみだった。そや冷たくて、うまい水だったのう。」

「外のとこにもうないの。」

「そう、ふしぎとここだけだったよ。耕地整理で、まがりくねって草や木のかぶさった川を、深く掘って、広いまっすぐな川に作りなおしただ。その時たくさんの黒い大木がでたんだと。石炭になるまえのまっ黒い楠だったげえな。その中にまん中が穴になっとるのが一本あって、その穴から水がこんこんとわきでとったんだと。その木は堤防に埋まっとって、どうにもとれなんだで、ちょこんと川へつきでたままで石垣でかこってしまったんだと。

『こやええ水のみ場ができた。』

てって、皆大よろこび。仕事の合間でもべんとうの後でも、うまいうまいってのんだもんだった。そこへおりていく石段まで作っておくれただよ。」

「コップなくて、どうしてのんだの。」

「顔を出水にくっつけて、こっくん、こっくんのむんだよ。この黒い楠から流れでる水は、ふしぎな大昔のことを知っとるようで、いつまでも息をとめては、水に顔をくっつけて、大昔の音をききながらのんだもんだよ。」

「どうしてなくなってしまったの。」

「さあ、どうしてずらか。地下水の道がかわって干あがってしまったずらか。堤防がこわれたのを直す工事の時、くだいてしまったずらか・・・・・。あんたたち、それをしらべて宿題にしたら。」

「うーん、だってどうしてしらべるの。」

「工事をやった人にきくとか、出水を最後にのんだ人をさがすとか・・・・・。」

「ひゃっ大へん。出水よ、どこいったあ。」

表浜むかし話

「三人兄弟と牛」

山田もと著

門の椿の木に、大きな黒牛をつないで、六年の正、四年の徳、三年の勝が牛小屋のまやをあげています。

よごれたしきわらを備中に引っかけて、たいひ小屋へひきずりながら、「おーもい、おーもい。」

「くーさい、くーさい。」

正と勝は、げらげら笑いながら、ひきずっています。

「おしら、なにょおちょうけとるだ。はや、やらんか。」

徳がどなります。日曜日の朝の、三人のきまった仕事です。新しいしきわらも入れてやります。

「さあ、牛をつれてこいよ。」

おとっつぁんがよびました。三人兄弟は顔を見合せました。

この牛は、浜で地引きあみをひく牛ですが、うちであずかっているのです。太いつのは天にむかってにゅーっとのび、大きな目はぎょろりー、ぎょろりー。浜で大ぜいの人にこき使われているせいか、とってもきついのです。

「おし、つれてってくよ。」

「なんだ兄きのくせに、つれてけよ。」

「……よーし。」

正は口をきっとむすんで、そうっと牛にちがづき、せ中に手をかけ、

「よし、よし……。」

とたんに牛は、ぐふーんと大きくくびをふり、足をふみならしました。

「ひゃーっ。」

正はとびのきました。勝はちかづくだけで牛ににらまれ、大きな息をふっかけられて、ちぢこんでしまいました。

前からうちにいる牛は、へいきでさわれるし、牛車も引かせられるのに。

「ぼうっ、ぼうーっ。」

徳はにこにこしながら、牛のよこ腹をぱたぱたたたいて前へいき、目をようく見ながら、椿の木のつなをとくと、

「しっ、ちょーっ。」

と号令をかけました。くびをふろうとする牛の鼻木を、しっかりつかんでいます。牛小屋の前でおとっつあんが、

「おしがつれてきたか、おしがなあ…。」

「こんな牛ぐらい、へっちゃらさ。」

「そうっか、おしがなあ。」

「兄き、へっぴりごしでちかづくだもの、なめられちゃうよ。」

「百姓家の長男が、牛にもさわれんでどうするずら。あとがつげるずらか。」

ぶつぶついってる、おとっつあんの小声は、だれの耳にも入りません。

大きくなって、正は飛行機のりになって、戦争で死にました。徳が牛を使って、百姓をやるようになりました。

表浜むかし話

「源五郎さの鍬（くわ）」

山田もと著

背がひくくて、がっしりしている源五郎さは、いつもピカピカの大きな鍬をかついで畑や田んぼにでかける。

「おい、水すまし源五郎さ泳げるかい。」

池にいる源五郎と名前が同じなので、子どもたちが面白がって遊びにくる。

源五郎さは、ほんとに池にいる源五郎のように、水にもぐるがうまいので池のゆりをぬく時、川をせき止めた板をはずす時、いつも池や川にもぐる。

雨の降らない暑い暑い夏、どこの田んぼもひびわれて稲は今にも枯れそう。用水地も水は底をついて、わずかなわき水がちょろちょろ流れているだけ。このちょろちょろ水を自分の田に入れようと、村の人は夜も昼も血まなこだ。もう水番さがふりわける水もないし、いうことをきいてもくれない。

源五郎さも鍬をかついで田まわりだ。水路にちびちび水が流れている。

「ちいとわけてもらうでのう。」

源五郎さは水路を半分せき止め、水が半分下へいくようにして、自分の田んぼの水口をあける。水はちょろちょろの半分田に入る。やれやれ、一息ついて次の田へいく。

「ああ、また上で止められたな。やれやれ、一雨降っておくれたらなあ。」

また半分わけてもらってつれてきた水を、自分の田へ入れようと、水口の芝土をとろうとした時、いきなり黒い長靴が、源五郎さの鍬をふんづけた。

「なにせるだい。」

「なにもかにもあるか。人の水をぬすみゃあがって。」

「日でりの水は、半分こと昔から・・・。」

「そんなこと誰がきめただ。おれが引いとる水だ。つべこべぬかすな。」

もう一ど鍬がふんづけられた。

「お、鍬を、おれの鍬を・・・」

だが源五郎さは立ち向かってゆけなかった。

その人が自分の子どもほど若いあばれ者だったから。いやそれよりも、百姓の魂だとして、だいじだいじにしている鍬を、あの泥靴でふんづけられたくやしさで口もきけないのだ。

昔からの半分この水は、みんな流れてゆく。その時ちょろちょろ水に流されながら源五郎が一匹いるではないか。

「おお、源五郎か、池が干上がるで出てきたか。まあおれの田んぼでくらせや。」

源五郎さは、黒いつやつやした源五郎をつかんで、自分の田に入れた。」

「世の中かわったな、源五郎や。」

さっきのくやしさがおさまって、源五郎さの体の中で、なにかがガラガラとくずれる音がした。

表浜むかし話

「おそでの山」

山田もと著

「とちの実ひろいにいかまいか。」

「そいでも、あの坂でころぶと、袖を片一方おいてくるだげえな。」

「きゃっ、おそがい。」

「そいでも、ころばにゃええがん。」

大ぜいのこどもたちは、わいわいがやがや、木の枝がおいかぶさった暗い坂道へ、とちの実をさがしにいくだぞな。

ほんのひとっぱしりの坂道で、くだってしまえば自動車さえ通る県道、のぼってしまえばのげいとの畑がひらけ、志田字のお宮様もあっての、まるでやぶの中のトンネルよ。

この坂ののぼり口に、大つぶな実のなるとちの木が一本あった。どんぐりやいまめはどこにでもあるで、だあれもほしがりゃせんが、きんかんより大きいこのとちの実は、こまを作ったりビー玉にしたり、げんろく袖に入れてころころさせているだけでも、うれしいものだったでのう、おばあが子どものころにはよ。

それで、なんとなくおそがいこの坂道で、ころばぬように、ころばぬようにと気をつけ、気をつけ、とちの実をさがしたものよ。

むかし、ずうっとむかし、この坂道の西につづく山の中に、おそでという人が住みついたそうな。どこからきたやら、なぜこんな山に住みついたやら、なんにもわからんだけど……。

古くなって、がらも見えん着物も、はじめはどんなにかきれいだったらしく、長いふり袖だったとよ。その着物の袖がちぎれても、片袖だけになっても、へいきで身にまとっていたそうな。

「どっかの金持ちの娘だらあに。」

「いや、売られたすえの病いでよ。」

「いずれ、つらい目にあわされて、あんねに気がふれてしまったずらよ。」

「あわれなことよのう。」

村のとしよりたちは、かたみにたべものや着物を、山の入り口へおいてやったと。そいでいつとはなしに、この山をおそでの山だ、おそでの坂道だというようになったんだと。

けど、ここでころぶと袖をおいてくるだといわれるようになったのは、どうしてだか、とんとわからんだぞえ。

とちの木はなくなったけど、おそでの山は今も田原町大草志田(※)に残っとる。広くなった坂道は、むかしの田原街道のなごりで、おそでのことも忘れられたのう。

※現在の田原市大草町志田

表浜むかし話

「中田恭一画伯」

山田もと著

恭一少年は、本をよみながら、のろのろ山道をあるいていく。畑へいかないとしかられるし、畑へつけば本もよめない。絵もかけない。それで、花がさいていると花をかく。とんぼがいると、じっとみていて写生する。畑へつくころは、夕ぐれになっている。

「百姓の子が、本や絵でめしがくえるか。はや畑のしごとをせよっ。」

と、おとうさんはいつもおこった。

恭一少年のかやには、50センチほどの、四かくな穴があけてあり、そこから首と手をだして、よなかまで絵をかいていた。カンテラの火を、かやの中へいれるとあぶないからで、ねる時は、その穴を紙でふさいでねた。

恭一は、大草小学校を卒業すると、神戸小学校の先生になった。

「こんやは、とまりばんだよ。」

といって家をでる日が多い。だが、学校のしごとをすますと、豊橋へまっしぐら、絵の勉強だった。

かすりの着物にしまのはかま、げたをはいて、歩いていくのだ。絵をならうと、また歩いて帰る。家へ帰ると夜明けだった。

やがて恭一は東京に出て、小学校の先生をしながら、絵の勉強にはげんだ。

美しい水と空が大すきな恭一は、大正8年、中学の先生になって、三重県伊賀(いが)上野(うえの)へ来て、その美しい水と空の風景をかいた。

昭和2年、大草(たいそう)と号してかいた、波切(なきり)のとうもろこしと海の絵が、帝展(ていてん)(今の日展)に入選した。つづいて、月ガ瀬の川と梅の絵、とば港と、つぎつぎ入選した。

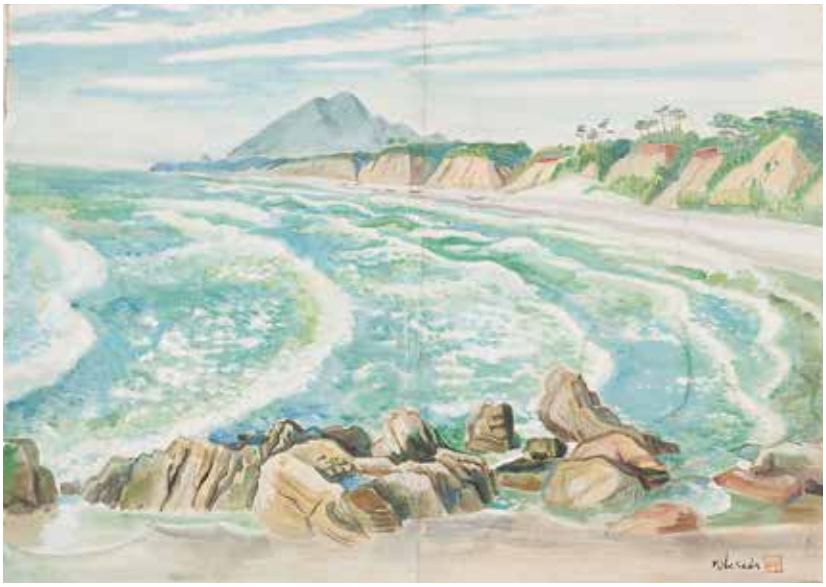
昭和9年、恭一画伯はまた東京へでたが、日本中を歩きまわって、かきたい所にいきあたると、いつまでもそこでかきつづけた。中学や女学校の、絵の教科書もかいた。いろいろの展らん会にも入選した。絵でくらしがたつようになったのである。

絵でめしはくえんとはんたいしたおとうさんが、病気になった時、恭一画伯は、毎日手紙をかいては出した。

戦争がはげしくなった19年、恭一画伯は、かぞくをつれて大草にもどった。もう、絵のぐも紙もなくなって、すきな風景はかけなかった。生活のため、戦死者のしょうぞう、かけじく、カーテンに何百枚と同じ絵もかいた。

まもなく体を悪くして、絵がかけなくなり、昭和35年になくなった。

大草(たいそう)画伯が勉強した絵が、今もたくさん残されている。



作品No.1「高松一色」中田恭一作
提供:田原市博物館(所蔵)

山田もと生誕100年記念事業

もとばあちゃんが残したたはらの民話

山田もとさんが好きだった椿

2019年、表浜地域づくり情報誌「潮騒」第21号で「生誕100年を前に　表浜地域の暮らしを表した山田もとさん」を紹介しました。創刊号から第18号まで毎号「表浜むかし話」のコーナーで表浜地域の暮らしや文化を昔話の形で伝えた方です。

その山田（旧姓：松本）もとさんは、1920年に現在の大草町志田で生まれました。生誕100年となる今年、田原市図書館・田原市博物館・大草校区が連携して、その生涯や作品を紹介する事業を行います。記念の年に改めて地元の作家山田もとさんの業績を振り返り、昔話を読んでみてはいかがでしょう。

主な記念事業

山田もとさん

1.記念行事

日時●12月20日（日）午後1時30分～3時40分
場所●田原文化会館 多目的ホール
定員●80名
内容●①成章高校演劇部による作品の朗読
②講演「地域のおはなしを語り継ぐ魅力」講師：内浦有美氏（ばったり堂）
③大草小学校4年生による演劇『水の歌』
④座談会
申込●11月14日（土）から、田原市図書館、田原市博物館、大草市民館で直接、電話、FAXで受付。

2.図書館・大草市民館展示

企画展「**生誕100年 もとばあちゃんが残した たはらの民話**」
期間●12月12日（土）～2月11日（木・祝）※渥美・赤羽根は1月9日（土）～
場所●田原市中央図書館、渥美図書館、赤羽根図書館、大草市民館
内容●年譜、展示パネル、関連資料ほか

3.博物館展示

平常展「**～渥美半島と文学～児童文学作家 山田もと**」
期間●12月5日（土）～2月7日（日）午前9時～午後5時（入館は4時30分まで）
場所●田原市博物館
内容●『水の歌』などの原稿、書簡ほか
観覧料●310円、小・中学生150円（ほの国こどもパスポート提示で小中学生は無料）

4.記念冊子『表浜むかし話』

内容●『潮騒』の連載記事「表浜むかし話」全18話をまとめた記念冊子を作成。
冊数●400部
配付先●市内市民館、小中学校ほか

「もと」ばあちゃんのおはなし
（2005年 田原市教育委員会 発行）

編集後記

この冊子は、郷土の児童文学作家　山田もとさんの生誕100年記念事業の一環として作成したものです。

表浜地域づくり情報誌「潮騒」（発行：田原市東部太平洋岸総合整備促進協議会）に山田もとさんが連載した「表浜むかし話」（第1～18号に掲載）、および生誕100年記念に関する特集記事（第21、22号に掲載）を抜粋し、一部加筆してまとめた内容になります。

この冊子を通して、山田もとさんの人となりについて、この地域に伝わる民話や伝説、人物について、また昔の田原の様子や子供たちの暮らしぶりについて多くの方に知っていただけましたら幸いです。

表浜むかし話
（山田もと生誕100年記念事業）
令和2（2020）年12月発行
発行◉田原市図書館　田原市博物館　大草校区
協賛◉田原市東部太平洋岸総合整備促進協議会
印刷◉共和印刷株式会社